

## 雅歌6章10節 「光輝く教会」

### 1A 暁の光

### 2A 月のような美しさ

### 3A 太陽のような明るさ

### 4A 軍勢のような恐ろしさ

## 本文

私たちの聖書通読の学びは、雅歌4章まで来ました。今日は、5章から8章までを読みたいと思いますが、今朝は6章10節に注目したいと思います。「**暁の光のように見おろしている、月のように美しい、太陽のように明るい、旗を掲げた軍勢のように恐ろしいもの。それはだれか。**」

ソロモンの周りにいる女性たちが、彼の妻に対して話しています。前半で学んだように、二人は結婚しました。けれども、互いの性生活において行き違いがありました。女のほうが、自分の怠慢に気づき、それでソロモンへの愛情を回復させます。そしてソロモンも改めて、彼女を見つけます。その彼女は、6章4節によると眩いばかりで、恐ろしいほどだと言っています。そして、その彼女の美しさは他の多くの王妃やそばめよりもまさって、その王妃やそばめをも、彼女のことを妬まないうで、むしろ彼女は幸いだと言ってほめています。単に、容姿の美しさではない、それ以上の美しさを、ソロモンの愛ゆえに彼女は放っていました。

先週学びましたように、男女の関係というのは、神の定められた制度の初めに来るものです。そして神は、男女の結婚関係をもって、ご自身と私たちとの関係を示しておられます。イスラエルの民に対しては、ご自身を夫と呼び、イスラエルを妻と呼ばれました。そして教会との関係においては、キリストが花婿であり教会が花嫁です。ですから、眩いばかりの美しさを放っていたソロモンの妻の姿は、キリストによって愛されている教会の姿と言ってもいいです。

### 1A 暁の光

初めに、「**暁の光のように見おろしている**」と言っています。夜が更けています。しかし、その暗き夜に、薄暗いけれども少しずつ明るくなってきています。そして朝日の光が入りそうになっています。そんな光景です。これは、まるで使徒ペテロが教会の人々に送った手紙の中身のようです。「2ペテロ 1:19 また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」再臨のキリストについて、この方が戻って来られることを灯として、預言に目を留めていなさいと勧めています。それからパウロも言いました。「ローマ 13:12 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。」と言いました。この世はどんどん悪くなっていきます。暗くなっています。けれども、暗くなれ

ばそれだけ、主が再臨される時が近づいていることを知るので。ですから、私たちは心の中で主を暁の光のようにして、預言を信じて光ることができます。

私たちの世界は、暗くなっています。私たちは、中世を「暗黒時代」と呼んでいます。それは私たちが啓蒙されて、開化されたからという前提で、中世時代をそう呼んでいます。しかし私たちは未だ、中世の時に起こっていたことと同じことを行なっています。近代において、ナチスのホロコーストがありました。ユダヤ人が六百万人殺されました。私たちが 2013 年にイスラエル旅行で、ホロコースト記念館に行きましたが、ガイドの人と私が話しました。彼女は、「昔は情報がそんなに早く伝わらなかったから、あの悲劇が起こったけれども、今は情報があるから同じことが起こるのかしら。」私は答えました、「情報はたくさんあっても、同じことが起こりますよ。」なんでそんなことが言えるのかと言えますと、終わりの日にユダヤ人の人たちが、ヤコブの苦難とも呼ばれる大患難を通ることが、エレミヤ書や黙示録 12 章に預言されているからです。けれども、そうでなくても、人間が進歩したとは到底思えません。

世界で数多くの人々が殺戮されています。北朝鮮では、政治強制収容所がありそこでは想像を絶する残虐な仕打ちが行われており、その中には私たちの兄弟姉妹、キリスト者たちもいます。イスラム国を始めとする過激集団が行っていることは、中世で行われていた以上の残虐行為です。私たちの国では、後藤健二さんと湯川遥菜さんが斬首に遭いました。そこで私たちは何かやっていますか？それを止めていますか？基本的に何もしていません。たまたま日本人だったから私たちの注目を集めたものの、イスラム国はほぼ毎日、同種の残虐な死刑を映像で流しています。ですから、そうしたことが情報としては出て来ているにも関わらず、今日の社会は、それを避けて日々の生活を楽しもうとしています。

黙示録 18 章には、終わりの日、主が再臨する前に大きな都バビロンが倒されることが預言されています。「18:22-24 立て琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッパを鳴らす者の声は、もうおまへのうちに聞かれなくなる。あらゆる技術を持った職人たちも、もうおまへのうちに見られなくなる。ひき臼の音も、もうおまへのうちに聞かれなくなる。ともしびの光は、もうおまへのうちに輝かなくなる。花婿、花嫁の声も、もうおまへのうちに聞かれなくなる。なぜなら、おまへの商人たちは地上の力ある者どもで、すべての国々の民がおまへの魔術にだまされていたからだ。また、預言者や聖徒たちの血、および地上で殺されたすべての人々の血が、この都の中に見いだされたからだ。」私たちは、多くの人々の血が、特にキリスト者の血がこれまで以上に流されている時代に生きています。それにも関わらず、自分たちは大丈夫だ、安全だ、平和だと言って生きているのが、この世であります。暗くなっているのですが、催眠術にかかったようになって、商業主義の中で自分たちのことだけ楽しんで生きているように作られているのが、この世であります。

そして私たちは、この日本において暗闇があります。自殺は毎年三万人以上です。これだけ、安全で平和で、豊かな国において、世界で有数の自殺の数になっていることは、日本への宣教を

考えている人にとっては、大きな関心事です。CNN の番組で、一人の 17 歳の女の子のインタビューがありました。学校のいじめを受けてきた子なのですが、夏休みはほっとする時期なのだそうです。そして新学期が始まる 9 月 1 日が最も苦しい時だそうです。18 歳以下の自殺の数の表を見ましたが、9 月 1 日が断トツで自殺の数が増えています。その次が 4 月初旬ですね、新学年の始まりです。

その彼女が言っていました、「日本は、他の人と歩調を合わせないといけないのです。それができないと、無視されるか、虐められるかします。…統一の意見を持たないといけないようになっていきます。それが、一人一人の独自性を潰しています。しかし、独自性は、誰かが壊せるものではありません。」<sup>1</sup>「そうですね、人を殺すところまで持っていく虐めの構造には、実はこうした同調圧力、何となく歩調を合わせていく強い流れがあります。それとなく周囲には何も問題がないようにしておいて、それで何となく人に合わせていくというものが強くあります。これは、私たちの周りに空気のように漂っています。一見、平穏なように見せておきながら、その陰湿な空気は殺人までをもたらす血に飢えています。パウロがこう言った通りです。「ローマ 3:14-17」彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。また、彼らは平和の道を知らない。」これほど、この世は暗くなっています。

しかし、私たちキリスト者は知っています。「光はやみのなかに輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。(ヨハネ 1:5)」光であられるキリストがこの世に来られました。キリストは、このような罪人を救うために来られました。そして罪を十字架の上で根こそぎに取り除き、そして甦ってくださいました。そして天に昇られた主は今、私たちのために執り成しをしてくださっています。そして間もなく戻ってきてくださいます。したがって、私たちは夜が更けていることを知っていながら、神の国が到来しそうになっていることを感じ取ることができるのです。暁の光が輝いています。

神の国には、主イエス・キリストの正義があります。主が初めに来られた時に、貧しい者、弱っている者、悪霊につかれた者、人々から疎外されている人のところに主が行かれたように、神の国には虐げというものはありません。「イザヤ 11:6-9 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」ですから、この御国が近づいているのです。

## 2A 月のような美しさ

そして、「**月のように美しい**」と言っています。夜空の中に、月が光輝いています。ここのヘブル語

---

<sup>1</sup> <http://edition.cnn.com/2015/09/01/asia/japan-teen-suicides/index.html>

は、白い光を放った月だそうです。つまり、黄色のものではなく、白身がかった光を放つ満月のようなイメージでしょう。

月の美しさは、その反射の光から来ています。その源はもちろん太陽です。再臨の主は、マラキ書で「**義の太陽**」と呼ばれています(4:2)。したがって、月が太陽の光によって輝き、美しくなるように、キリスト者もキリストが来られるという希望によって、この方を見つめることによって、その光を反射することができます。「2コリント 3:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。」イエス様の栄光を見れば見るほど、私たちは御霊に満たされ、主の栄光と同じ形に変えられるということです。

私たちはしばしば、自分の内から美しさを出さなければいけないとってしまいます。自分の内を眺めたら、醜さしかありません。だから、クリスチャンとしてダメなのだというレッテルを貼ってしまいます。しかし、主は私たち自身を美しくするためにクリスチャンにしたのではありません。キリストの美しさが映し出されるために、私たちを召したのです。私たちがイエス様のすばらしさ、その麗しさ、罪人を忍ばれ、執り成しを捧げ、そして身代わりになるほど愛され、そして父なる神を信じて、三日目に甦られました。イエス様を見つめていくのです。自分をイエス様に比較して生きています。イエス様が大好きになります。この作業が、そのまま聖霊によって皆さんをキリストの似姿に近づけます。「ヘブル 12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。」

私たちは、イエス様に目を向けていますか？これだけすばらしいお方に惚れ込んでいますか？イエス様に目を向ける時に邪魔になるのが、自分の背負っている罪や重荷です。ですから、この御言葉の手前でヘブル書の著者は、「私たちも、いっさいの重荷とまわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。(1 節)」と言っています。今、来年のイスラエル・ヨルダン旅行の準備をしていますが、2010 年に行ったヨルダンのペトラのことを思い出します。そこで途中から自由行動になって、私はルーム・メイトといっしょに、ナバタイ人がいけにえを捧げていた「高き所」に上ることにしました。けれども、ものすごい高い所にあり、集合時間までに間に合うか不安でしたが、私よりも五歳ぐらい若い彼に付いていけば、何とかなると思ったのです。彼から目を離さなければ上り切ることができると思いました。その時に、自分のことは忘れます。不思議に忘れます。太ももが痛くなっていたかもしれない、けれども気になりませんでした。このように、主から目を離さない、この方のすばらしさを見つめる時に、私たちは自ら、思い煩い、重荷、まわりつく罪を捨てることができます。

### **3A 太陽のような明るさ**

そして、「**太陽のように明るい**」とあります。主イエス・キリストご自身が義の太陽としてこの世に来られます。「マラキ 4:2 しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにはね回る。」そして黙示録において、

イエス様は使徒ヨハネの前に現れて、義の太陽の光によって現れました。「1:13-16 それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゆうのようであり、その声は大水の音のようであった。また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。」この後、ヨハネは死人のようになってしまいましたが、愛するイエス様は彼を立ち上がらせてくださいました。この太陽のような光は、義を表しており、また聖さを表しています。

しかし、私たちはイエス様の聖さとは、ほど遠い自分の至らなさを見えています。争いがあります、妬みがあります。無慈悲があり、怒りがあり憎しみさえあります。先ほど話したこの世にある暗闇、その醜さが自分たちの間にもあります。まだキリストの幼子ではないですか、肉に属しているのではないですかと、パウロはコリントの人たちを、叱責しました。そして、個人の生活の中でも欠けを見ます。必ずしも職場で、会社で証しを立てているとは到底思えない時があります。家庭でもそうでしょう、キリスト者としてあるべき態度を、自分の伴侶、息子、娘、そして親に示せていません。

しかし、信仰による義は、驚くべき恵みを私たちに示してくれています。使徒パウロはこのように叫んでいます。「ローマ 5:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」なぜ、そこまで大胆になれるのでしょうか？信仰によって義と認められたということは、キリストの義が私たちに転嫁されたことを意味するからです。私たちの罪がキリストの十字架に移り、キリストの義が私たちに移りました。まるで、私とイエス様が同じ手術室にいて、隣り合わせに寝かされて、血液の完全な交換手術をしたようなものです。私の罪にまみれた血が主に移動し、主の聖なる血が私の体に移動したのです。したがって、神が私たちを見る時に、完全な者とみなされるのです。キリストにあって完全なのです。だから、今、パウロは爆発的な喜びで、神の栄光を見上げています。

私たちが完全な者にされるのは、主が戻って来られる時です。その時に、この卑しい体がキリストに似た新しい体、栄光の体に変えられます。けれども、永遠の神であり、救い主であられる方は、もう既にキリストにあって、その完成された姿として私たちを見てくださっています。「ローマ 8:30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」ですから、私たちが焼き尽くすはずの義と聖による太陽の火は、むしろ私たちが癒す光線となってくれています。

#### **4A 軍勢のような恐ろしさ**

そして、最後に「**旗を掲げた軍勢のように恐ろしいもの。それはだれか。**」と語っています。キリストの太陽の輝きによって、その輝きがあまりにも眩しくて軍勢のように恐ろしい、と語っています。そうです、ここに戦う教会の特徴が表れています。

パウロがコロサイ人たちに説明しました。「コロサイ 1:13 神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」暗闇の圧政から、愛する御子の支配の中に私たちが移された、これが救いです。彼はまた、ヘロデ・アグリッパ二世に対しても、こう弁明しています。イエス様がパウロに語られました。「使徒 26:18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあつて御国を受け継がせるためである。」サタンの支配から神に立ち返ることが起こりました。

したがって、私たちがキリスト者になったということ自体が、この世の暗闇に対して光の勢力となったのであり、初めから悪魔と悪霊どもの勢力から激しい抵抗を受けるということに意味しています。キリスト者はまず、どこに悪魔の策略があるのかを見抜かなければいけません。先ほど話したように、日本社会の中では「なんとなく」というのが強い力、つまり罪や悪をはっきりさせないというのは悪魔の策略の一貫であります。イエス様に会い、この方と歩調を合わせると、次第に私たちは良いと思っていた事柄が、そうではないことに気づきます。群衆たちがイエス様に付いて行って、自分たちは付いていっていると思っているけれども、イエス様が彼らの心にある問題をはっきりと述べられたのに似ています。

先ほど、世界に迫害が起こっていることを話しました。けれども、日本に迫害がないということではありません。むしろ、大いにあります。それは、物理的は迫害ではなく、霊的なものです。自由や平和、豊かさがあるようでいて、真の自由、真の平和、真の豊かさがない、得ようとしてもなかなか得られないという、抑圧的な雰囲気があります。ですからヘブル書で書かれていることは、とても重要なのです。「ヘブル 4:12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」みことばを真剣に求め、そして心の深いところを探っていただきます。そして、そのために私たちは互いに学びます。集まって祈り、賛美し、御言葉に聞き、そして分かち合います。インターネットで聞くだけでは決して得られない、その時に御霊がしてくださる分かち合いがあります。それで建て上げられます。

私たちはまず、内なる戦いに備えないといけません、それはキリストの初めの愛を失うという戦いです。「黙示 2:4-5 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをなさい。」キリストの愛に駆り立てられるという自分がいなかったら、それは悪魔によって自分の心が痛めつけられている徴です。救われた時には喜び、楽しみ、平安、愛があつたのに、それがどこかに行ってしまった。そうしたら、どこで自分がつまずいたかを見てください。そして次に兄弟に対する愛を保つという戦いです。「1ヨハネ 3:10 そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行なわない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」カインが弟アベルを憎みました。同じように、悪魔は私たちが、同じ神によって造られ、同じ神

によって新たに生まれた兄弟と姉妹から離れ、付き合わず、関係のない生活をするように仕向けます。イスカリオテのユダがイエス様に対して行なったことも、つまりはこれでした。何度もイエス様に口づけをしながら、イエス様を売り渡すという裏切りをしたのです。口づけしながら、憎むことはできるのです。

しかし私たちが、キリストの愛に満たされ、兄弟に対する愛を保つならば、そこには最強のチームがいます。主は神に立ち返るイスラエルの人々を、こうしてくださると言われます。「イザヤ41:15 見よ。わたしはあなたを鋭い、新しいもろ刃の打穀機とする。あなたは、山々を踏みつけて粉々に砕く。丘をもみがらのようにする。」打穀機のように、どんな山のように見える障壁であっても、もみ殻のようにしてくださいます。光の勢力となって、闇の中にいる人々を救い出すことができるのです。

パウロがピリピ人に対して言いました。「1:27-28 ただ、キリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、また、どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。それは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。これは神から出たことです。」霊を一つにしてしっかりと立ち、思いを一つにして福音の信仰のために奮闘しています。私たちが自分を忘れキリストだけを思い、そして他の兄弟たちのことを思うならば、そこには何にもかえがたい一致が生まれます。一致しているからこそ、互いに信仰の盾によって悪霊の火矢に対抗し、前進できます。ローマ兵は個人で戦ったりしませんでした。必ず部隊の中で動きます。そして戦場においては、テストドムといって、自分たちを盾で囲み、亀の甲羅のようにして、それで前に少しずつ前進していきます。ですから一致するのです。そして戦うということを忘れてはいけません。敵に後姿を見せないようにしましょう。しっかりと主にあって立つのです、そうすれば必ず勝てます。敵は、「旗を掲げた軍勢のように恐ろしいもの。」と私たちを見て、震え慄きます。